きるのは、実に幸せな機会とあらためての実感である。そして席上揮毫は二組に分かれて頂いての実演で、観覧スペースも十分。各先生の自在の筆捌きを間近で子細に観られて好演出。あちこちのテーブルから歎声が上がっていた。最後に久野北崖副会長の閉会の言葉で、密度の濃い研修は幕を閉じた。その後夜の懇親会は、木村大澤理事長の挨拶、松浦白碩副理事長の乾杯で始まり、豆子名誉会長もカラオケに参加下さったりと、和やかに親睦を深めた。

講話抄録 ①

「漢字の字体と字形」

風岡五城会長

夏の研修会は準会員や会友の皆さんに多く参加して欲しいが、今日はそういった方々にも向けて題を選んだつもりで、書の奥義を授ける様な難しい話ではない。

漢字の字体と字形とどう違うか。十年近く前、ある高校で「漢字テストの不思議」というビデオが話題になった。内容は、書き取りテスト時に先生によって採点基準が違う—A先生とB先生で違う—一体漢字テストというのは何を基準に○×をつけているのかがテーマ。結局○×がぶれるという事は、字体と字形の認識が皆違う、区別が明確についていないというのが原因の一つなのだ。例えば「三」。頭に浮かぶものは横画三本、恐らく皆共通していると思うが、一人一人書いて貰うと多分色々な形になる。基本的には横画三本あれば「三」という漢字だ。つまり概念的な文字の骨格、それが「字体」。太目でも細めでも見た目は違うが骨格は同じである。対して、視覚化されて見える形になったのが所謂「字形」。「人」で例えると、字体としてはハライも止めも考えなくて良い。本来漢字のテストというのは字体のテストなのであって、止め・ハネ・ハライが無くても字体本体が正しければ○にすべきなのだ。が、学校では同時に書写の授業も担当する。止めやハネ等も教えるのだから悩む。字体を基準にして正しいか否かを決める時と、書写的に見ての時とは違う。正しさというのは、文字としての正しさと書写的なそれと二つあると思った方が良いかも知れない。ここが混乱する原因なのであるが。又、字体の骨格としての正しさというのは楷書に限らない。草書でも画の長短によって字体を分かつ。では字体の正しさとは。現在は常用漢字が制定されていて、新聞、公文書等全てに使われている。個人の使用に関しては制限・限定するものではなくも、国内の公的・一般的なものに関してはその範囲で使って、という事になっている。常用漢字とはというと、「常用漢字表に個々の漢字の字体を、明朝体活字のうちの一種を例に用いて示した」とある。しかし字体を示す事は難しい。字体とは、本当は頭の中に概念的にあるだけだから、皆それぞれ形にして表すと違う。頭の中のものを実際に示す事は出来ないので、それで明朝体活字の一種を例に用いて示したという訳だ。つまり常用漢字表では字体（骨組み）を一種示し、対して明朝体以外の漢字や手書きの文字で、実際に書くと当然出てくる違いについては、表現上の相違として認識してくれという事なのだ。

それにしても書道をやっていると、常用漢字以外、色々な文字が出てくるが、字体として正しいかどうかはその時の国が決める。それは、正しいとすると

定めている訳だ。それ以外の文字は、使われていても「正」に対して全て異体字なのであり、新字源（角川書店）によればその種類は①本字②古字③別体字④俗字⑤誤字の五つである。又、活字体に対して書写体という言葉もある。実際に手書きすると、「高・高」「場・場」のようにスタイルが違う。このように複雑でもあるが、一応漢字の正しい骨組みというのは現在は、常用漢字の字体が正しいとされているのである。

これに対し、字形の正しさについては学習指導要領に、漢字の指導においては「学年別漢字配当表」に示す漢字の字体を標準とすること、とある。これを読むと、つい字体と字形を混同してここに出ている形が標準と思い込みがちで、混乱が生じる。教師もこの表にある形が標準で正しい形だと指導してしまいがちだが、あくまで標準とするのは字体であって字形ではないのだ。書写の指導というのは、文字としての正しさ（字体）を根底において、どんな形に書き表していくと読み易く書き易い字になるかという事を導くものなのである。そして字形の要素としては、①文字の概形②文字の中心③画の長短④画と画の間⑤点画の方向⑥点画の接し方⑦点画の交わり方⑧左右の組み立て方⑨上下の組み立て方⑩内外の組み立て方、がある。ただこれを字形として正しいと捉えると、色々な処で矛盾が出てくる。例えば「園」。字形としては中身の所はハラってあるが、字体としては止めても良い。「遠」の同じ部分は書的に止めて正解。「書」の横画はどれが最も長いか。一画強調が書的だが、配当表には二画と五画も長く載っている。色々調べると、適当に多く混在しているのだ。実は止めたり止めなかったり、ハラったりハラわなかったりは、字形としてこのスタイルを表しているのであって、長短の長さが変わったりハネの有無の違いも正誤の基準ではないし、「木」が「ホ」の形の場合もまた然り。本来は字体として見るべきで、この配当表に出てくる字形の形でなければと考えてはならないと認識する必要がある。

ハネの根拠は隷書に依り、字源から要るハネ、手書きで続けて書く時に自然に出るハネ、なければならぬハネがあり、また見た目のものもある（ハネによって文字の求心力を高める＝字形と文字感覚）のだ。

文字の特徴を知る—古典の臨書をする時に何に気をつけたらよいか—楷書の文字造形にはパターンがある事を知っておくと、古典の見方が違ってくると思う。九成宮の背勢、顔氏の向勢、孔子廟は向勢と言われるが直勢も交じり複雑。蘇孝慈墓誌は直勢で単純だ。この様に同じ漢字でも造形的に特徴がある。更に、①左収右放②左放右収。唐・北魏の楷書をこの観点からみると、唐は①で北魏は②。時代・地域により美意識が全然違うので覚えておくと良い。

最後に、我々も字形を正確に捉えるにおいて先入観、錯覚にとらわれる事が多い。視点・角度を変えて観ることだ。拡大したり正面から見たり離れたり。日を替えたり裏から見たり等々。やがて字形の特徴が解ってくるのだ。

（ホームページ掲載予定）

講話抄録②

「書道あれこれ」

豆子甲水之名誉会長

▼始めに何から話せばいいか難しいが、風岡先生のお話を引き継ぐ形で私流に話したい。今、ボードに○と×を書いたが、これを単なる符号と思うか、文字と思うか。これは甲骨文字の占いで使われた、吉凶を表したもの。▼ゲイの旧字体は二十画ある（藝）。現代は（芸）となって国がこれを正しいとした。書というものは本来、漢字の発達からすると右から書くのが本当

で、今は何故左から書くようになったかというと、西洋文字の影響に違いない。左書きの文章を、国が良しと定めたので今はこうなったと思うが、漢字の発生から・・後ろ聞こえますか？（笑）

▼皆さん、死が明日に迫ると、人間はまずきっと慌てる。それを無くす為に書道は必要なのだ。書というものは一体どういうものかという事を考えて欲しい。書道にとって一番大切な事を文字一字で表すと、「気」を挙げたい。気は物質の最も細かい目にも見えないもの。中国ではこの気の思想というものは世紀発生時代からのもので、気が解けると死ぬ。また「念」とは人が発する想い・心である。念をいかに放つか。書というのは、一念込めなければ書とは言えない。だからその者の総てが封じ込まれている、特に毛筆で書かれたものは簡単に足で踏んだりしないで欲しい。書を踏んだ者は、明日から足が腐ってくると昔は教えられたものだ。このように、書とは何かをしっかり知って書くという事が肝心である。▼教室にあるカレンダーの一月に、「念仏とは、自己を発見する事である」と書いてある。私はカトリックだから念仏とは関係ないが、善光寺、延暦寺など仕事はお寺のものも多い。十月には、「世の中が便利になって一番困っているのは実は人間である」とある。一度便利になったものはやめるのが難しい。便利に慣れてしまうのだ。▼宇宙に充満する気を自らの体内に取り込んで、元気いっぱいの書を書いて欲しい。念という自分の抱いたものをぶつける―一念を込める―気・念

というものは凄い力を持っているものだ。気功の達人は気の力で本当に倒す。物質でも形が緩やかで自由な状態、例えば水はゆったりとあれば穏やかな川であるが、濁流となれば被害をもたらす。形がわからなくなる程その働きは強くなるのだ。気というものは充満すると凄い力になる。気・念という言葉をしっかりと記憶しておいてもらいたい。▼「生死大事」という有名な墨蹟があるが、これは忘れてはならない言葉。我々は、よくよく考えてみると、今日あって明日無き身。人間死ぬ時は死ぬ。だから明日死んでもいい為にも書を一生懸命したい。明日死んでもいいからこの書を一つ残す、という者の書は本当の書になると思う。そして書というものは、手でなく頭で書くものだと十分知って頂きたい。私の「穿石一言録」には自画像を描いているが、頭から下は描いていない。頭が一番の勝負処である。▼なんせ書は四千年という歴史を持っている。そして現代の文字の根本を創ったのは後漢の蔡邕。この人が山に籠って一念込めて書の事を考え、点画の基本を確立した。点と線の「三折の法」、音で例えるとトン・ツウ・トンという三つの運動。これは今も続けられている全ての原則だ。▼遊びを求めるじゃなくて芸術を志す者は、生きる事の価値を創っていく事。何事も一生懸命究めんとする処に価値がある。今回の私の話には資料が無い。今回は、私の生の声を聴いて頂きたい思いであります。くり返すが書道は全て考えるところから始まる事を知ってほしい。眼を肥やして人の書を観て自分の書と較べ合うのも勉強なんだが、良い書を観ての大いなる感動、そういう過去の在る人は必ず上手くなるでしょう。京都に居た頃、祇園祭時、各戸に有る名筆をタダで見せてくれたものだ。繊維会社に勤めた頃に書を学んだが、その時の師に基本点画だけを教える教室があった。そういう修練を受けて今の私がある。良い書を観ても何の感動も無い様な観方はだめで、本物か偽物か判るようにならないと。私は古いものを観ることに専念した。▼「非理法権天」

という言葉がある。人事はつまるところ天命のまま動く、天を欺く事はできないといった意だが、これが書道にも教え多き言葉である。理屈に合わないものはダメだが理屈に合っても法則に従わないものもダメだ。「法」が書の元。「灋」（法の旧字）一度得たものを逃さない様、堤を造って自分の水を確保した鹿からきた文字。書法を守らねばならない。今度「※温故知新」の大字揮毫をするが（四日市市文化会館です）、これは芸術・建築などどんなジャンルでも、一つの事を究めていく基本の言葉である。▼書道を本当に愛するとは、どういう事か。恋愛は男女が交際することだが、本当のそれは、寝ても覚めても相手を想う事。それが最高の状態と思うが、人は裏切ることもする。が、書は裏切らない。書が上手にならないと思う人は、もっともっと書を愛さねばいけない。▼書の極意・免許皆伝とは何か。今日皆さんに覚えて帰って欲しいのは、最初に言った、「気・念」。正しき気を静かに自分の中に閉じ込めるのだ。紙の前に座って、今自分は宇宙の中心に居り、生きて天の命によって今から一つの書を書くのだ。今迄学んできた事・師に言われた事を思い返し、そして一念を出す。この書が書けたら明日死んでもいい―そういう気持ちになって一度墨を付けたら、もう後のことは考えない。一気に無心に書き上げた最初の一枚、これが本当の書だ。もう一枚もう一枚は捨てよ。最初の一枚、これに勝負をかける。そして書けた後必ず貼って自分の書をみて、もっとこうと思ったら初めからもう一度座り直して一から始める。続けて行う浅はかは捨てて欲しい。書いて書いては、しないほうが良いと思う。▼地球は我々を乗せて太陽の周りを時速三千キロで走っている。その上に我々は生きている訳だ。だから書に臨む時、明日があると絶対思わないで、時間を無駄にせずに全力を尽くしてほしい。今日も明日も、そして明後日もと願っています。

（ホームページ掲載予定）

※実際の大字揮毫では「人中之龍」が書かれました。

要約者・加藤松亭